

蛇足

秋野 成道

浄土真宗系の大学が三鷹にある。設立当初は女子の学校であつたらしいが、現在は共学である。この大学では以前から生涯学習講座を開講している。対面授業やオンラインでの授業を何度か受けた。良心的な受講料で、講座の内容も満足できるものだった。

昨年末から今年の始めにかけて、「歴史小説を書く」という講座を受講した。私は主に歴史物の愚作を書いているので、参考になることがあるかも知れないと期待しての受講だった。講師のM氏は多くの著書を出版しているようだ。この大学で教えたこともあるらしい。

M氏の話では、歴史小説は史実に沿って書くタイプ（例えば森鷗外）と、歴史を作家の解釈で書くタイプ（例えば司馬遼太郎）がある。M氏は後者のタイプだそう。

森鷗外の『大塩平八郎』は天保の大塩平八郎の乱を、

時系列に沿って記述したものである。『渋江抽斎』は資料をもとに淡々と抽斎の生涯を描いてゆく。

司馬遼太郎は周知のように、自分のカラーに染めて歴史的人物を描いてゆく。例えば坂本龍馬、斎藤道三である。

司馬遼タイプの作家にとつての醍醐味は、歴史をまたは人物を、自分の解釈によつて表現できる点に尽きるところと思う。私ごときが愚作の例を挙げるのはおこがましいが、山県有朋やまがたありともについて記述したことがある。通信制の大学で学んだ者たちが、現状をメールで連絡しようという設定で、五人を登場させた。始めに登場した人物は、すでに八十歳を越えた老人である。以下のようなメールを学友に送った。

八十歳になってやっと博士課程を修了いたしました。皆さんと知り合った大学の通信制の大学院です。この歳になって何故博士号を取得したのか、そうお聞きになつてほしいです。それは、

「一声もあげずに終わりたいくない」

そう思ったからです。私の人生にはなにかが欠けていました。だから、博士号取得を最大の目標に掲げま

した。

テーマは私のライフワークである「アジア・太平洋戦争」です。七十歳を越えてから、皆さんとお会いした大学に入学しました。その時からこのテーマを考え続けてきました。なぜあの戦争が起きたのか、誰が起したのか、私なりに真相を突き詰めたかった。

私の生家は深川にありました。父は一九四四年サイパン島で戦死しました。母と二人で暮らしていました。東京大空襲があった一九四五年三月に、焼け出されて祖母が住む母の実家の行田に疎開しました。

日本はその年の八月十五日に敗戦しました。その前夜のことです。隣町の熊谷に大空襲がありました。遠くから線香花火のパチパチというような音がたて続きに鳴って、火花が上がるのを見えました。その火花が忽ちかたまつて大きな炎となつて、町を覆いつくすのを見えました。母も祖母も泣いていました。私は子供ながらに、なんてひどい事をするのだと思いました。敗戦後は食べるものがなくて辛い思いをしました。こんな思いをさせた米国を憎みました。

行田の家は土間を改装して貸本屋を営んでいました。亡くなった祖父がやっていた店を祖母が引き継ぎました。戦後人々は活字に飢えていたので、主に子供向け

の読み本や漫画が多かったのですが、大人も借りに来ました。古本屋から仕入れて大人向けの本も増やしたので、三人で何とか食い繋ぐことができました。祖母が亡くなった後は母が受け継ぎ、私も店番を手伝いました。小銭商売ですが、遺族年金とこのおかげで熊谷の商業高校に行くことができました。

高校を卒業して、石鹸を作る会社に入社しました。配属は墨田区にある工場で、出納の担当をしました。岩戸景気と呼ばれる時代でした。仕事が忙しく、だんだんと豊かになってゆきました。戦争のことを思い出すことは少なくなりました。

五十五歳で定年を迎えましたが、定年後も関係会社の非常勤監査役として、六十九歳まで仕事を続けさせてもらいました。決算期以外は週に一度勤務すればよいので、余暇に歴史の本を読むようになりました。そして、あの戦争について真剣に考えるようになりました。無差別殺人を犯した米国を生涯許すことはありませんが、もっと憎むべきはこの戦争を引き起こした日本の指導者ではなかるうか、そう思うようになりました。それを確かめたく、七十歳で皆さんとお会いした大学に入学しました。私は高卒ですので一学年から四年間学び、その後修士課程を三年、博士課程を三年で

終了しました。

博士論文は「山県有朋と明治三十三年五月十九日の勅令第一九三号と第一九四号」です。この研究をテーマにして博士号が欲しかったのです。この論文で博士号が認められれば、私の考えが正しい証だと思つたのです。内容については後ほど触れます。

一九四五年八月十五日に天皇のポツダム宣言受諾放送があり、日本国民だけでなく、日本が侵略したアジアと太平洋諸国の国民が、日本の圧政と侵略から解放されました。

日本が侵略したのは、台湾、朝鮮、中国、インドネシア、フィリピン、ビルマ、ベトナム、ラオス、カンボジア、マレーシア、シンガポール、ソロモン諸島、ミクロネシア諸島などです。各国で日本軍や特高などに殺害された人たちがどれほどの数に上るのか、正確な数はわかっていません。この惨事に対して日本政府が賠償責任を負い実行したのは、フィリピン、ベトナム、ビルマ、インドネシアの四方国のみで、総額は三六〇億円強でした。賠償請求権を放棄したラオス、カンボジア、シンガポール、マレーシア、ミクロネシアなどには総額で六百億円程度の経済協力を行ったた

けです。

しかし、最大の被害国であった中国、朝鮮、台湾には何らの賠償も実施していません。韓国がいまだに注文前大統領時代）慰安婦問題や強制労働者に対する訴訟を起こしているのは、国内の失政を隠す意図が強いものの、歴史的には一理あることは否めません。

日本人の戦没者についても正確な数はわかっていません。政府の発表によると、戦死した日本軍兵士は二三〇万人、戦地で戦没した一般市民は三〇万人、戦災で死亡した一般市民は五〇万人で、合計三一〇万人が戦争によって亡くなったとされています（一九六三年五月十四日の閣議決定『「戦没者追悼式の実施に関する件」において「戦没者」について』で公表）。しかし、戦争の混乱期に正確な調査がなされたとは到底思えず、実際の被害者はこれをはるかに越えていると思われまます。

敗戦の結果、東京裁判ではA級戦犯として逮捕された百数十人のうち二十八名が起訴され、東条英機をはじめ七名が絞首刑、十六名が終身刑、二名が禁錮刑に処されました。米、英、豪、蘭、仏、中国、フィリピンの七カ国の法廷で行われたBC級戦犯の裁判では、五六四四人が起訴され、逮捕者は二万五千人を超えま

した。うち九三四人が死刑となり三四〇〇人以上が終身刑を含む有期刑に処されました。しかしその後、生き残ったほとんどの戦犯は時期の長短はあっても釈放されました。A級戦犯においても、公職追放の期間があったものの、岸信介をはじめ多くの者が政財界に復帰しました。戦争責任の根本的追及がないままに「戦後」が始まり、うやむやの内に「もはや戦後ではなくなって」しまったのです。

私が問題としたのは、この戦争の起因はどこにあったのか、誰が日本を軍国主義に導いたのかという点にあります。

私たちが学ばされてきた近世、近代史は明治政府が脚色した恣意的なものです。むしろ外国の歴史家の記述の方が客観性が高いといえます。たとえば、日本人にもかなり広範に読まれているアンドルー・ゴードンの『日本の200年』(A Modern History of Japan: from Tokugawa Times to the Present)を見ると、明治維新を、

一八六七〜一八六八年に若干十代の明治天皇を擁して実現された「王政復古」自体は、クーデターにすぎなかった。

と記述しています。「明治維新」というのは、薩長の反乱を文飾したもので実体はクーデターです。幸い批判的な近代史が続々と出版されています。これらの史料を参考に、日本を戦争に導いた要因を探ってみました。その結果、私はその根源は明治のクーデターの二世代が作り上げた、と考えるようになりました。

明治の動きを調べて行くうちに、二人の人間に絞ることができました。クーデターでは端役だった伊藤博文と山県有朋です。大久保利通や岩倉具視がクーデターを主導したとしても、国体と軍国化を主導したのは大久保でも岩倉でもありません。国体の原理を伊藤が、軍国路線を山県が推し進めたのです。伊藤の話はさて置き、山県の自己への権力の集中と軍国化推進への一つの方法が、陸海軍大臣を現役に限るとした規定でした。この点を少し説明します。

山県は軍人出身者として、第三代と第九代首相として政治の中樞に立ちました。第九代首相の時に、軍部大臣を現役大将・中将に限ることとし、その任用範囲を制限しました。これが博士論文のテーマです。陸海軍大臣が現役と規定されたことにより、退役軍人にはなんの発言力も影響力もなくなりました。山県は境界に転出しながらも、特に陸軍では絶対的な権力を握っ

ていました。息のかかった現役の将校を大臣にして自分の意に従わせ、山県の権力を犯しそうな退役軍人を締め出したのです。そうして軍隊を増大化させて、自分に権力を集中させてゆきました。内閣も軍部の要求を無視しては成立を不可能にし、軍部の政治への介入と独走の伏線を作りました。山県が「軍閥の祖」と言われる所以はここにあります。山県亡き後も、軍部で権力を握った男が、またはその一派が、対立する軍人を退役にして排除し、政治を牛耳って日本を戦争へと駆り立てたのです。私には山県と東条のイメージが重なって見えるのです。

山県は武士でも下層の出でした。普通なら立身出世談として慕われたはずですが、国民からも同じ政治家からも嫌われていました。原敬に、「山県の陰険なる事今更驚くにも足らざれども、畢竟現内閣を動かさんと欲して成功せざるに煩悶し此の姑息な手段に出たるならん」（『原敬日記』）と言わしめるほど、なにかにつけて政治に介入し、意に添わない方針にはあらゆる手をつくして妨害しました。治安警察法を制定して、労働運動や農民運動に弾圧を加えたのも山県です。

博士論文の審査は、まず学内の担当教授を含めた三

名の教授で審査が行われ、この口頭試問に合格した論文に対して、学外の専門家一名を交えて最終審査が行われます。この時は緊張しました。何を質問されてもよいように、分厚いバインダーに資料を詰め込んで臨みました。およそ一時間半に及ぶ審査でした。終わった時はどっと疲れが出ました。同時に終わったという安堵感がありました。

つつい長い話になってしまいました。論文に興味がある方には、後日PDFをお送りします。

パソコンで自家製の名刺を作りました。渡す相手もほとんどいませんが、名前の上に「文学博士」と肩書を入れました。博士号授与式には家内と一緒に京都に行き、正装をして臨みました。会社勤めの時に、社長から「経理部長を命ずる」と伝達を受けて以来、数年ぶりの授与式でした。

その夜、東京に戻って家内と帝国ホテルで晚餐をいたしました。シャンパン酒にフランス産の葡萄酒、フオアグラのソテーにソールボンファミ。おいしかったです。こんなにおいしい料理を食べたのは久しぶりでした。

「おめでとうございます」

と家内に言われた時は、思わず目頭が熱くなりました

た。

人生八十年と決めていましたが、まだもう少し生きてゆけそうです。燃え尽き症候群という程たいした事はしていないのですが、何か脱力感があります。今心配をしているのは、これでやり遂げたと油断している、老人性痴呆症になってしまいうでのはないかということ。早く次を見つけないといけません。

春の日や八十路の夢は叶いけり

辞世ではありませんよ。

では時節柄皆さんにはご自愛をお願いいたします。

司馬遼太郎は坂本龍馬のことが好きだったらしい。だからあのように描いた。『坂の上の雲』では、旅順の戦闘に際しての乃木希典を、愚将として描いている。司馬は乃木希典が嫌いだっと思う。

多くの歴史作家が憧れるのは司馬遼タイプである。私たちの持つ坂本龍馬観は、司馬遼の坂本観である。他の作家が龍馬を武器商人の手下であったとか、薩長同盟には何等関与していなかったと描こうと、司馬遼の影響から免れることはなさそうである。それほどの影響を及ぼすことに憧れる歴史作家が多いのである。

M氏も然りである。

私はこの講座を途中で受講するのを止めた。この大学の講座では初めてのことだった。一つは、この講座は「歴史小説の書き方」のヒントを講義するというように、結局はM氏の自慢話と宣伝であったためである。しかし、最大の原因は次の事による。

周知のようにドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』は、第一部のみで終わった未完の大作である。第二部がどのようなようになっていたのかは誰もが興味を抱く点である。第二部が完成していないがために、さまざまに想像が膨らむのである。

しかしこの大作に対して、並の作家や評論家が第二部を想定して論じたり書いたりすることは、禁じ手であると思っている。

ある時この第二部を書いた日本人がいることを知った。その時の率直な印象は、「なんと愚かなことをするのだ」というものであった。

実はその人がこの講座のM氏であった。講座の中でそのことを、何の恥じらいもなく、むしろ自慢げに語るのを聞いて、それ以上の受講は止めたのであった。